多士済々

今月号では、岡﨑木材工業株式会社の代表取締役である岡﨑玄二郎氏にお話を伺いました。

岡﨑木材工業株式会社
OKAZAKI WOOD WORKS CO., LTD.

岡﨑木材工業株式会社

所在地	山口市小郡上郷 901－23
連絡先	083-922-1624
HP	http://www.okazaki-wood.co.jp/
代表	岡﨑玄二郎


本社外観

ホームページ

●沿革

大正 2年 3月	建具店として創業
昭和25年12月	株式会社岡﨑建具店を設立
昭和38年 1月	岡﨑木材工業株式会社へ改称
平成 9年 6月	山口県流通センターへ全面移転
平成22年	海外進出
平成24年	創業100周年を迎える
令和 8年	執行役員制度を導入

●建具から事業展開、創業 110 年を超える「木のものづくり」集団

岡﨑木材工業の始まりは、大正2年に曽祖父の岡﨑太市が建具店として創業したことです。その後、昭和25年に株式会社岡﨑建具店として法人化して、祖父の岡﨑吉郎が代表に就任。昭和38年に現在の社名へと改称しています。

建具から木造作、家具製作へと手がける領域を広げ、創業から110年を超える歴史を重ねてきました。現在は、建築の内装部分にあたる造作や家具、建具の設計・製造と、それに伴う施工管理が事業全体の約90%を占めています。旅館やホテル、飲食店、オフィス、公共施設などの木を活かした空間づくり・ものづくりが中心で、お客様との打ち合わせを重ねながら的確にニーズをつかみ、設計から施工まで一貫して担っています。

「お客様に満足していただく仕事をし、会社にかかわるすべての人の幸せを実現する」という経営理念のもと、19歳から79歳のベテランまで、幅広い年齢層の社員約60名とともに、木を通じてお客様の想いをカタチにする仕事に日々向き合っています。


ウッドデザイン賞 2022 で奨励賞（審査委員長賞）を受賞した小郡幼稚園での施工事例

●お客様の「想いをカタチ」にする仕事

私たちは建築という大きな枠の中の一部を担っているので、お客様が何を求めているかを的確につかみ、それを実現することに重きを置いています。ご予算やイメージに合わせて最適なものを提案するので、値段を優先される場合は予算に合ったものを、質にこだわられる場合は良い木材を揃えます。

また、図面だけでは、完成の姿をお互いに共有しきれないこともあります。出来上がってから「イメージと違う」とならないようサンプルを積極的に製作し、木の大きさや太さ、幅や配置などを確認しながら仕事を進めることもあります。木は一本ずつ幅も形も違うので、お客様のイメージに一番近い配置や形を一緒に考えていくことを大切にしています。


サンプルで製作したシェルフ（本棚）

●山口から日本全国へ、海外にも進出

私たちの仕事は、一般的な住宅にあるようなものではなく、旅館やホテル、飲食店の内装など、こだわりのある特殊な木の空間やものづくりをご依頼いただく場合が多いです。そうした案件は県内では限られるため、外に仕事を求めていくようになりました。

かつて目標のひとつにしていた東京2020オリンピックに向けた新国立競技場の建設に関わる案件をお任せいただくなど、県外の仕事の多くは、一つひとつの実績を積み重ね、そこから紹介やご縁で広がっていったものです。確実に仕上げることが、次にお声がけいただくきっかけになります。

また、海外での仕事にも積極的に取り組んでいます。海外進出のきっかけは、木製建具を専門とする秋田の大栄木工さんが海外に出ることを考えられており、建具以外の仕事を当社に任せたいと声をかけてくださったことでした。


新国立競技場での作業の様子と実際に施工したベンチ

最初の案件は、シンガポールにある1887年創業の格式あるホテル「ラッフルズホテル」内の寿司店に納める桧（ひのき）のカウンターでした。和食ブームが始まった頃で、海外に出る寿司店がこだわりの和風の店内をつくることを求める時期と重なり、多くのプロジェクトに参加。シンガポールの他にも香港やマカオ、マレーシア、インドネシアなどで寿司店を中心に和食レストランや和室などの内装を手掛けてきました。カウンターや、網代天井、建具、障子、その他家具などの依頼をいただいています。

海外では就労ビザの制約があり、現地で道具を使って作業をするには労働ビザが必要になります。そのため、海外では監督として現地の職人の

方に作業をお願いすることが主となります。コロナ禍では各国の富裕層が国外旅行の代わりに国内での食事を楽しむようになったことで、かえって和食ブームが起こりました。高価格帯の寿司店はむしろ景気が良く、依頼をいただくことも多かった時期です。


シンガポールで施工したカウンターと網代天井


香港で携わった和食料理屋の内装内の様子

最終段階や重要な局面では必ず現地に足を運んで確認するようにしていますが、コロナ禍で渡航できない中でも現地とリモートで連携しながら進める体制が整い、以前ほど頻繁に渡航しなくても対応できるようになりました。現在は、ベトナム、シンガポール、香港、ニューヨークでの案件が進んでいます。

●隈研吾氏監修、木を活かした空気清浄機の製造にも携わる


本物の木を使ったプラズマクラスター空気清浄機

2年ほど前には、隈研吾建築都市設計事務所がデザイン監修された特注のシャープ㈱のプラズマクラスター空気清浄機の木製部品の製造を担いました。設計者の推薦を通じて依頼していただいた仕事です。すだれのようにすき間を空けた「簾虫籠（すわしこ）」という日本の伝統的意匠であるモチーフに本物のオーク材を使用したつくりで、通常はプラスチックなどで作られる部分を木で仕上げるという挑戦でした。釘を一切使わず、手作業で組み上げています。

これまでの仕事と異なり、電化製品の検査基準は非常に厳しいものでした。強度や、一つひとつの部品が外れないための安定した品質や精度が求められ、合格するまで何度も試作を繰り返しました。

●体制の見直し、垣根をなくす執行役員制の導入

これまでは営業管理、製作、現場とグループごとに分かれ、その下に木取り部門や造作製作部門、家具製作部門などと細かく枝分かれしていましたが、この体制を見直し、執行役員制を導入しました。従来は私や専務が直接に業務運営に関する指示を出していたのですが、班長やリーダー経験者からグループごとの責任者を決め、経営の意思決定・監督を行う取締役と、現場の業務執行を担う執行役員を分けたのです。従業員にとっては工場での製作も現場作業も全て含めて基本的には何でもできるようにすることが目的となります。迅速な意思決定と効率化を図る仕組みになるようにしました。変化の速度がとても速い時代なので、私や専務だけでなく、若手による新しい風が必要だと考えています。多くの方の知恵を借りて、経営の舵取りを行っていきたい考えです。

●オフィスリニューアルと担い手をつくる採用活動






フルリニューアルしたオフィス内の様子

2019年にはデザイン設計から施工まですべてを自社スタッフで手掛けた社内のフルリニューアルに取り組み、情報を共有しやすい環境づくりを行いました。それまで2階にあった経理と1階の事務所を1つのフロアに集約。「社長を含むオフィス勤務するスタッフの顔が見渡せる」オフィスを目指しました。オリジナルの机は三角形の3人掛けで、相手の様子が分かりやすくなり、ミーティングを設定しなくても、その場で相談ができるようなつくりにしました。

また、当社では採用活動にも力を入れています。業界では大工の担い手不足が続いており、美しく剛健な木工建築をこの先も受け継いでいくには、大工さんという仕事の魅力を発信し、イメージを変える必要もあると思います。県内にとどまらず、全国や世界でも活躍するチャンスがあること、チームワークで動くことによるワークライフバランスの実現や、男性ばかりのイメージが強い業界でも3名の女性の職人が活躍していることなどをPRしながら、働きやすさの向上や、仕事から得られるメリットを高めることに注力しています。

毎年1人～2人を採用していた時期もありましたが、1人では相談相手がおらず辞めてしまうケースもありました。同期という存在は大切なようです。そこで一昨年は4名を採用したところ、今でも4名全員が働いてくれています。今年は採用を行いませんでしたが、来年度はまた新たに社員を迎えたいと考えています。

初任給の平均が上がる中、それに耐えうる利益を出さなければ採用は難しくなると考えています。良い仕事をして、会社の価値を高め、その上で当社に合う人材を採用していきたいと思っています。


工場内で働かれる女性の大工さん

●変化の時代に、木の仕事をつなぐ

これまでのコンピュータ制御で切削を行うようなNC加工などの自動化とは異なり、AIを導入した機械化は、業界に大きな影響をあたえる可能性があると見ています。職人不足も背景に、図面を読み込ませてその通りにできるようになるのであれば、人がやる必要性がなくなることも考えられます。その上で、どういう仕事をしていくのか、どう生き残っていくのかを考えなければなりません。

執行役員を中心としたチームで会社を継続し、社員の力で会社を盛り上げ、柔軟に変化に対応できる組織にできればと考えています。これまでは岡崎家の者が代表を務めてきましたが、これからは誰が担っても成り立つ会社にすることも一つの目標です。変わり続ける力を持ちながら、これからも想いをカタチにする仕事に向き合っていきたいと考えています。